





壽
五十一屋
瀬吉物町角
四十八

自序



長存九日五言菊月うち
志そりそあやし記つるを
みとみおの勢をちきるたそ
いひのそつそけかき婦者
好む無きるをさかつるむと
隠る子れその免そせぬはな

壽
五十一屋
瀬吉物町角
四十八

先師玄筆居士の口に
木の心出〜まき〜ゆ〜く
汲や山路乃と流を慕ふを
木下井の縁起して植ゆひ
まふ〜人〜ま〜ま〜法〜〜獨
こも筆杖を引〜た〜り
ゆふ又心木のゆ〜ち〜阿里

人阿〜若心返りも形を師の
秋情を志め〜し〜木杖の〜ん
心ま〜阿〜ま〜ま〜法〜〜獨
〜ゆ〜ゆ〜ゆ杖折て〜ま〜
侍流〜ゆ〜阿〜若心返りも
ありぬ筆杖を引〜た〜り
と利〜ゆ〜ゆ〜ゆ杖折て〜ま〜

いさゝか〜〜菊〜〜
紅葉〜〜おとてあ〜あ
阿〜〜橋木ふ雲ぬる〜
あ〜〜

安永四年の〜〜 末秋 吉義人

菊のふし

菊もま〜〜あ〜つふ〜あ〜

嵐雪

山路く〜〜山路此有る〜

夜免

玉液と〜〜涌れ〜〜

八重〜〜福〜〜

大白〜〜画も大白の〜〜紙

紅〜〜夕立〜〜くあ〜〜の〜〜

菊^り 予世綿のむらあさいふ礼糸
又老君ここ花老世ぬおひの一言
全目^を捨^けけ^も又め^りり^{ある}全目貫
百秋^子 とくと百秋よとこひはあこま
小菘 小む^りみ^ひ福も^も恋の^ややん
袋菊 さかーあ^くく^く福^めく^るき^く
大般若 秋風^り干^きく^く大般若
菊^は 阿^くく^め酒^のま^りく^く

花園 白妙^{より}す^す園路^に存^る若^き神
十日菊 十日^くの^返も^そく^くあ^く
隠^居子 引^立く^く花^をま^くむ^る隠^居子
仙^家 初^に仙^家く^く山^に獨^活
^十 黄^菊 蝶^を黄^よ黄^よの^深川^らん
契^子 墓^りく^くを^むり^く
板^歌 ち^んく^くも^も女子^{あり}
抱^吸 蝶^の嘉^例を^あく^く一^粒

北菊 古風さものさくらちうる破屋後
乱菊 志ハク水声リリふと乱曲
と咲 ちかちかふととむく程子仕とさり
こま菊 小令の系 誠馬とくはく
今菊 今さくち時ふま——さ乃瘡
鞠花 糸さうまき 鞠をいふと
月朶 松柳い川道も涼——月朶
まき 裳えんらき 池の響き

乙女 神さひくみ十さうり北舞乙女
赤菊 ま——ちひうけよかふる人形
得 糸おの日ハうけなう——得 緋
菊 此側 百ちく 菊めさる
取菊 比々二度 糸和の杖乃花盛
菊 心うりかきよてはうきさの者

其列

菊は香の綿よ志よさるる長梧

園伽よ汲茶よけむ菊の流よ系 人九

行先より伴るの女やきく此室 百貞

白菊や美ふよ香あもつかりん 鬼秀

若世綿よ我志よ菊の河よ川 逸賀

夕よ止の露よちり菊乃志 夜梧

白菊や志あきを染る秋も心 文母

くぬくぬ目をつつそや菊より然り能 玉斧

鎌倉の古よ菊は雨に人 花明

地をあよ風志河めりり菊は毒 隆川

白菊や十日香老の心よ免も 瑞喬

菊よくやふよ人乃徑より 言雄

面晴く葉も志よ菊の月暮りぬ 稻星

音ふも多物と菊はあや一か 免洲

よよ菊又古一菊の心ぬ 葵太

おとろくの葉子秋志るや菊の花 子牛

牡丹小ハ十日まきさるやきくはるふ 春扇

新次も葉肉も平りり菊のは形 杉吾

白菊のふりし物とおしこり 小英

葉子あり酒阿里門ノ菊は花 松隣

をの川うゝ露あそふくさくの庭 女 莖路

菊は香や明はそと古き硯さる 文来

志くく菊や志着ハ風うきさりけも 虚舟

ふの川ぬせと目鏡と菊の雛の形 五折

傍菊や花も母衣毛をやりあそを 葵也

志くくア目と何ふ一ノ菊の葉 連牛

菊のうふ先赤さをや切そ先そ 阿人

うゝ枯や筒うけひりや乃こる菊 系 徳九

女房玉中流く傍ノ詠集一ノ時

きせ綿や蒼張な〜ぬ人〜る 吐月

黒くよき〜おひはめりり菊毒 夜免

紅梅歌仙

人あしの海のちかむる影さう肌
日と西山より秋の志川より
目つひよ友好法也侍玉免
縁よりあれさか袖志朱硯
梅漬のよふあしなると白せそ
まゝ来つそぬ花哉障なり

暮々

夜免

雲立の仁王をいよふ荒むる
活れささくも系志あきと
かうし月の李白を肩より打懸く
ささくあふささ赤いりあり
秋もささくも志松の舞立乃ほ里
そ空をけても代々此事知
汲みしそ之夜うそぬ唐辛子
旁らち志のくそ乃毛纏

舟乃人とお位の詠くよそ何そ
きく舟そとちくさりたよ恒
比きまゝの花枝に居候よそ詠
海老よりうらうらとあまふ
東風そよと縹子産子をゆりし
乃ち〜は朽くみ〜さあのか
ちり〜の日やけをのそく清み歌
毒ともさ〜り珊瑚〜も侍

緋威ハ正うぬ和艦の右ひ〜り
松伐おろさ〜氏れ夜侍事
折く〜神の機始を小豆飯
亭主れ好か烏帽子あてゆる
然乞の赤面をすむ〜思案
き〜さ〜〜〜柿のさ〜なせ
沖荒て翹け〜〜ぬ浦の月
送候〜〜〜赤魚の供養小

十
 嫁衣も病もさききりさき
 ちんちん第此志のふさぎく
 のとちんちん園の籠をちんちん
 蹴躑躅のけと桃乃ちんちん
 丹頂れちんちん競ふ花ちんちん
 喜ハはくくくくくくくくくく

其引

活弁もい川志ちんちん初紅葉 染心
 紅葉も実のちんちんかちんちん 丹頂
 川輝の一本う川ちんちん初紅葉 連丈
 新島もも波焼ちんちんちん 鳳岩
 加川ちんちん八舟のちんちんちん 鳴泉
 夕晴やりちんちん麻此新島 翠羽
 ちんちんちんあり初橋 湖堂

折落る花こそちけきそ何れも
 深松
 こそちを中へあつたにふりて
 富屋
 初紅葉ふりてみれば一ふ
 山幸
 志賀ハチの荒波をるお糸か
 丸有
 湯門も侍人さくさくは夕のち
 直麦
 あつたの古よりと紅葉の林
 牛家
 夕お糸をちや汐ゆく海士の加
 意長
 御らるまれば楠をさくさく紅葉
 子無

入日をもとすぬきそ紅葉が
 汀留
 細道より鞍ふも門や苔もさ
 卜有
 おりく屋にもあつたお糸が
 飛虎
 菊をさる秋と照なり夕のち
 吉磨
 日の初をさる橋の紅葉が
 蓍衣
 木をゆきそ白家や夕お糸
 玉峰
 多形ともさくさく紅葉が
 吐丹
 たをる時お糸の中乃もさか
 夜念

雜秋

庭前梧葉落 庭中蟋蟀鳴

神奈川賦

光廣の秋もむらさき

秋涼—代々の紀行は

天府

夜舟

渡舟や 暮舟の

全

妻少の暮夕多し 秋日てり世の中

よつとと詠—らんをわひひて

三府公を足送たてき川にわたり

川くや 暮うさめも秋ひたり

暮太

暮れは 色あさうと 朝の秋

秋 挽圖

秋の川や ささくはの 花さうり

涼花

竹葉ふ 女も来さう 今朝暮れ

貞面

暮れし 少室あうと 思ひうり

風足

朝の月や ささくはの 風うり

曲川

暮し下り花もふ葉もかへりり 筑後 官榮

朝顔や木魚の音も折るり 仙臺 古道

あさうほやむろう小庵乃泊る 梅堂

い川吹く心はる落葉む相ひく系 女 赤み

秋風や松小も暮れしうさかり 出羽 投茶

あきこのせや舞子の涙も越天楽 下総 鹽泊

特風や萩のり越る波乃を 友珠

秋の勢や雲のぬけし扇子より 文尺

ふかほしやうさも果ぬる枕 花酒

紀の夜代もさ製しはる柳の系

曇りつゝるものま人のたまひらる

折かゝもうさしけれ

七夕や飯の香あゝぬ曇る人 葵太

此のあハ糸もさほりし河 女 月む

星逢演

星垂也淡なる〜こも世をより 夜免

花活よき蜻蛉のいづれ贈るまで

ぬる指のふらふらひら〜毒 全

鶯此を〜うける百の月夜うれ 三冬

燈籠や傾城の笑ひあ〜池ノ家 長臨言

う川〜や身在中なる盆の人 尾張 曉基

ふる〜いおもろぬ月や生れ玉 山幸

隈あ〜も阿是それも又盆此月 駿府 金危

傾城此傾城等〜多ま海川里 夜免

嵐將

深更小物音あり斬をめ〜ふ玉ありりも

あ〜は又汁の寒きさむる也〜まのいひ

やを〜起よりんをさ〜の志れものなり

賊め乃の法〜すハ弓よとの具よ〜ありそ

投ま〜窓もた〜かあ〜こた〜は〜こ〜み

追はめ鼓鳴さぬと乃〜志るよの〜りれ

日古海之や流くくくく河のるるま神志
 加獲少や穰粟のくくくもや少は練房此
 諒計もく河まで糧うくくく河よ後や
 くくくむ地獄の鏡解極未此運飯小目を
 くまはいつちをさすともなく少あのみ
 多り猫の尾はくくく桶の口を乃くくく
 ん地ふんあ一の大臣のかハ衣坊かくくく
 うくや何あくくくめく此くくく君や肌

氣尾草のくく後法もくくく危 夜免

あ川ま屋よ奥ある葉のめはひか 千慮
 葉のまやおくくくたくくく為月秋 乳筆
 稲も今そくくくく里乃隔く神 仙臺 枕司
 照かくくく日のちるくくくやく河嵐 京於 嘯山
 取くくくくまはくくく字芭蕉のく 全 蝶菱
 朝膏やくくく白起くくく侍處所、 儿董

驚下りて、常は濡るは園屋哉 洗水

ある秋のころに此歌をさうして

竹とて

作きぬる中よ玉あり月の露、吐月

うけ

琴ははる春木小とさき浦一斧此塔 夜光

奏菴をうやこの部や虫の声 水交

初夜後転と老をうそをけ虫の奏 大坂 田圃

敦盛此萩小く

節の音も、春多あくと春水萩 全 泉明

眸より、あつめふそく、虫のうそ 上流 指丹

八羽や、春ささく、めと梅花 倉庫

本母寺よりあそふ

名月や花小と春心十五日 梅所

月ぬ山よはく、咲日とらふの月 白翹

名月や我玉川アタマ下ノ書テゆく 班石

星を皆客と降ルあへんハふの月 飛求

陽を此中よこそあはぬハ月ハ 後河 洛梅

天よあはれを偏とあへんけ婦乃月ハ 尾張 也右

名月や阿久川アキカハきうけてテさしテ 仙氏

鶴をひの捨ニ舟ノうりテ月ノ忍ル家 五三

名月や森を森ぬハもあはぬハ 采我

明月や地ふも風ノ川ノ樹ノの影ハ 新 求光

名月や鏡ノ福ノ日ノあリあリ 後府 年得

名月ノのうラんニあリてハ家ノ此ノ麻ハ 今 月巢

明月やあリてハ麻ノのハ影ハ 夜免

文科

とくし 柳ノ小ノ姨ノ於テの影ハ也ハ 画ハ

ぬラんノあリてハ麻ノのハ影ハ 画ハ

姨ノをハあリてハ世ノすテけハむハ山ノ志ノ月ハ 冬ノ右

世ノすテけハむハ山ノ志ノ月ハ 冬ノ右

名もやいさようふりてはまらるるん 女 田美

山の樫と榛多のありや二日存 誼府 兀子

くさうけのさうぬ理少を驚うね 祇卜

さうめてむとをや驚うるり 真波

ひしとせ下地の上よりうりらむ

稲妻や木も女筑波のをまらるる 山幸

樫らま——宿も寝らる小夜寝 綿衣

風よりハおとろさやまらねたう那 子交

谷の戸れ麻より細——小夜寝 朝衣

世うくうりの定家うくくや充角力 夜充

言隠を元と出りりお撲取 下地 眠江

あうけうく相と八んえぬ靴うね 全 巴蓼

草智くさあうくく祢破芭蕉 之思

白雪の飛つく——くや秋の安士 蓼房

彼岸あり様河を梅も竹乃春 思る 菖叟

大佛を早りきゆふ世分りぬ 尾張 蝶社

木つたさの夕日をたぐくこす染衣 下地 喜返

後の世此事さくおひふ秋長うふ 班象

山多乃枝少このゆふ夜長か時 信陽 暮村

九月坊屋とくまきりくくく

急ぐくも何やん模枕よ海ひて

おひく秋長うちかありき

稲舟やちう紙中夜ぬるか目さめ 夜免

心すすちよゆいこさりし 冥方の層 全

初層や今銀屏此さあこり 摺籠

こり一丈の清き実なり層乃声 稲牛

風よふ声あけりしと秋長うふ 賦雪

浅舟より芦丈あけて夜もむか 時中

くく一待星もあけりしと秋長 上総 石意

草も木をたぐりしと秋の夜 若狭 茶屋

是ちくくの秋山ありり秋の暮 をに 暮る

くけもあき後二不一川殊れく 長崎 天社屋

腸れ白うもく川や阿さ乃暮 赤岩 阪宗

藤笠のくかうはやくや秋の昏 上原 月嘯

鏡塔れせむく厚きう殊乃暮 白清

はさ立山

桂こえそ秀く川山や秋のく 山幸

鴨く川は

きり川鴨のおりもいつく秋れ暮 夜光

浦北管屋

くは帆を名屋のまを殊乃く 夢太

船中あきく柿盗人や乃ちけ月 暁車

稻舟をいけきくくく 南氏

表もさくく横顔忍く 晋成

篠くちるものく 業源

秋兔子の影をばしりて陰續合と

つるまをりうねるれつは六組の

梓うさげく月見多あふり

白の底澄うはあけて月夜うれ

暮古

高菱椒誓意

指心と川きぬ目もあし唐辛子

夜気

高樾待意

仄占やあくろようくう川せ樾

全

草穂心

袖ふしきくぬの山やきのと栲

全

草穂や名とく海あうく山ハ名

園半

弓法始矣りり外影やおし水

然我

面の日を始り顔ある桑山子うか

茶汁

十日不とまきくんはハかし

橋友

秋風北あしきくめよ桑山子うか

画鏡

あ〜〜けり秋の夜長を人
富〜〜と山か〜〜
菜更〜〜す日〜〜
お〜〜菊の夜長〜
お〜〜み〜〜の山〜
き〜〜の巻〜
な〜〜鐵〜〜の〜

花〜〜葉〜〜葉は色花
己〜〜の梅の夜長
と〜〜の夜長
乃〜〜費長房の夜長
得〜〜其〜
き〜〜と〜
壽〜〜秋山家

是るもむむむむ雪申
 夢古空の摩樓ゆゝ
 志の如し

安永五申初集

彫工 吉田魚川

西村源六板

雪中庵俳書目錄	書林西村文刻堂藏
續五色墨 <small>竹阿 宗瑞 素丸 班象 英太</small>	續百番句合 <small>馬光評 史宅</small>
きんじり百負 <small>吉岡撰</small>	芭蕉菴再興集 <small>英太編</small>
新笈引集 <small>山幸撰</small>	朝比集 <small>桃袒撰</small>
附合小鏡 <small>牛家著</small>	三春日記 <small>英太述</small>
去砂子歌 <small>曾成 無求 子交 著</small>	画のこゝ <small>近刻 山幸撰</small>
歌時百負 <small>近刻 吏中著</small>	其角文集 <small>近刻 英太撰</small>
芭蕉菴附合集 <small>近刻 英太撰</small>	及川清たふら <small>近刻</small>
住吉千句 <small>一冊 夜卷 英太 吐月</small>	蓮花會 <small>三冊 英太撰</small>

秋山家

夜魁撰

14-11-11

